

論文内容の要約

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻人間科学プログラム
2018年度入学

(学 生 番 号) 181700090

ふりがな
(氏名) ほりぐち まさひろ
堀口 真宏

1. 論文題目

PTSD とバーンアウトの関連からみた救援支援者の心理的負担における意味付けの再考

2. 論文要約

本研究の目的は、PTSD とバーンアウトの関連からみた救援・支援者の心理的負担感における意味付けの捉えなおしを検討したものである。

第1章の救援・支援者の心理的負担における研究の概観では、第1節においてバーンアウト概念についての定義とバーンアウトの症状をまとめ、半世紀を超えて研究されているバーンアウト研究における実証研究の変遷についてレビューを行った。また、第2節においては、PTSD 研究の歴史的変遷について示し、DSM による診断概念として PTSD が確立していった背景について触れ、DSM-5 までの PTSD の変遷についての記述を行った。次に、第3節では、救援・支援者における研究についての概観を行い、その中でも海岸救援者における研究、東日本大震災における災害支援者における研究のレビューを行った。以上のような先行研究を概観した後、本研究における研究の立場と目的について述べ、方法の検討について言及した。

第2章1節では、海岸救援者の職務に関連した心理的負担感についての実態を把握するために質問紙を用いた量的調査を実施し、検討を行った。その結果、PTSD 傾向 (IES-R 得点)・救助経験を複数持つ者は、得点が有意に高いという結果となった。救助回数が単回の者と複数回の者とで t 検定を行ったところ有意差が認められた。このことから、海岸救援において心理的負担からの回復が得られないうちに新たな負担を抱える可能性が考えられた。また、バーンアウト得点と PTSD 傾向との関連については、「情緒的消耗感」、「脱人格化」、「個人的達成感」に相関がみられた。第2章2節では、尺度では測りきれない救援者の心理的負担や支援についての主観的意味付けを検討するために SCT (文章完成法)

を作成し、PTSD 傾向の高低が存在する場合、イメージの差異があるかについて検討した。

第3章1節では、海岸救援者の心理的負担について時間的経過による変化を検討するために2年後の縦断的な質問紙調査を実施した。前回の参加者から協力を得られた方を対象として検討をおこなった。PTSD 傾向得点の平均について対応のある t 検定の結果、有意差が認められ、救助の出来事に対する PTSD 得点は有意に減少した。また、2年間に衝撃的な救助について「体験有り」の者と「体験無し」の者で現在の得点に差があるのかについて t 検定を行ったところ、衝撃的な救助に遭遇する機会が複数回の者の方が、PTSD 傾向が高いという結果となった。次に第2節では海岸救援者の救援者の心理的負担や支援についての主観的意味付けの2年間での変化について検討した。また、SCT によるイメージが2年前の語りとどのような変化があるのかについて検討した。SCT による記述について、KJ 法を用いて以下の観点から回答をカテゴリー化し、回答の度数を PTSD 傾向 (IES-R 得点) における高・低の二群に分けてクロス表を作成し、カイ二乗検定による分析を行った。

第4章1節では、東日本大震災における災害支援者の職務に関連した心理的負担感についての実態を把握するために質問紙を用いた調査を実施した。その結果、PTSD 傾向得点とバーンアウト得点との関連では、PTSD 得点と「個人的達成感」、「情緒的消耗感」に相関がみられた。次に、第2節では、被災された方に対して支援を行っている災害支援者を対象に調査を行った。ここでは、災害支援者が「支援」に対してどのようなイメージを有しているかについて SCT (文章完成法) を実施し、テキストマイニングによる分析を行った。分析方法は、対応分析、共起ネットワークの分析をおこなった。ここでは、災害支援者の「支援」に対するイメージについて PTSD 傾向の高低という観点からも考察を行った。その結果、PTSD 傾向高・低群での支援に対するイメージに相違が見られた。そのような結果から、本研究からは、救援支援者に対する支援のシステム構築の必要性が示唆された。